ところ会　3 月 OP 行事案内

狭山三十三観音を巡る　第 1 回

狭山湖周辺にある狭山三十三観音を 4 回分けて周ります。
今回は第 1 番金乗院（山口観音）～第 8 番新光寺までです。

記

■日　　時：平成 29 年 4 月 6 日（木）
9:05 西武球場前駅改札付近に集合して下さい。
西所沢駅発 8:55 の電車で西武球場前駅に 9:01 に着きます。
雨天の場合は 4 月 7 日（金）に実施します。

■見学場所及び時間：コース全長約　9.5km
西武球場前駅(9：05)⇒ 1 番金乗院（山口観音）⇒ 3 番六斎堂
⇒ 4 番正智庵：休憩⇒ 5 番勝光寺⇒ 2 番仏蔵院⇒ 6 番瑞岩寺
⇒昼食 12:30～⇒ 7 番瑞普門院⇒ 8 番新光寺
⇒所沢（予定時間 15:20 頃）

■昼食：彩玉軒　　12:30～13:30（ラーメン・中華料理の彩玉軒）
04-2939-2664

狭山三十三観音

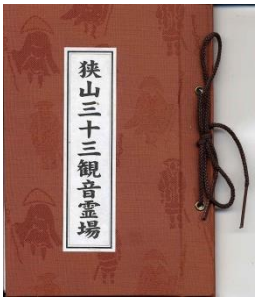
狭山三十三観音は所沢市、東村山市、東大和市、武蔵村山市、瑞穂町、入間市にわたり多摩湖、狭山湖の周りを「の」の字を描くように点在しています。

狭山三十三観音のおこりは、天明８年（1788)、金乗院（山口観音）の亮盛和尚が三ケ島妙善院の万泉和尚と共に作りました。それ故に 1 番が金乗院、33 番が妙善院となっています。三十三観音は一周 39km の道のりですが、それを 4 回に分けて周りたいと思います。

	日付	周る 三十三観音	開始駅～終了駅 （またはバス停留所）	距離
1	3 月 30 日 （木）	①金乗院～ ⑧新光寺	西武遊園地駅～所沢駅	9km
2	5 月 25 日 （木）	⑨梅岩寺～ ⑯三光院	東村山駅～武蔵大和駅	8.5km
3	9 月 28 日 （木）	⑰霊性庵～ ㉕福正禅寺	武蔵大和駅 ～バス停殿ケ谷	10km
4	11 月 30 日 （木）	㉖山際観音堂 ～㉝妙善院	バス停東野高校入り口 ～バス停大日堂	10km

・札所には納経所があります。本来は字の通り写経を納めるところですが、朱印を貰いにいくところです。金乗院で専用納経帳が購入できます。（1000 円）

納経帳といっても、中身は無く、表紙のみで、お経が 2 種類入っています。大きさは 13.5cm×19.5cm です。納経代は　３００円。



・三十三観音

観音経では観音の三十三種の変化身により、衆生の悩みに応じて救うと説きます。観音経が浸透すると同時に、観音の三十三変化身の数字に意味を持たせて観音三十三霊場がつくられるようになりました。

また、古代インドでは三は多数を表すことから三に三を重ねる三十三は無限を表すといいます。

１番金乗院（山口観音）：千手観音

山口観音は**吾庵山金乗院放光寺**といい真言宗豊山派の寺院で、**本尊は千手観音**。1200 年前に行基菩薩が開いたと伝えられています。金乗院には二体の千手観音像があり、表観音とよばれる仏像は、秘仏ですが、33 年に一度御開帳になります。裏観音は、藤原様式を伝える市指定文化財です。本堂の天井には墨絵の「**鳴き竜**」が描かれています。山口観音は狭山三十三観音霊場の第１番札所として秩父や武蔵野など西関東の人々から深い信仰を集めてきた観音様です。

金乗院十八世**亮盛和尚**は、伽藍整備に尽力し現在の十間四面の観音堂を建立しました。亮盛和尚は「坂東観音霊場記」をはじめとして多くの著作を江戸の本屋から出版したりしています。また江戸で出開帳を行っています。「山口詣」も亮盛が書いたものではないかと伝えられているそうです。

山口観音では新田義貞が鎌倉攻めの際、ここに立ち寄り戦勝の祈願をしたとされ、**伝新田義貞祈願文**が伝えられていて、元弘三年庚申五月十五日の日付と義貞の花押が書かれています。また境内には**義貞誓いの桜**と呼ばれる桜の木や、**義貞公霊馬**などがあります。

文化財

・木造千手観音立像　市内で最も古い仏像の一つ（市指定文化財）
・六歌仙図大絵巻　　石川文松画（市指定文化財）182cm×273cm

裏観音、本尊の表観音は秘仏

・冨士巻狩図大絵馬　　三上文筌画（市指定文化財）
・煙草屋図大絵馬　　観斎画　　（市指定文化財）

三上文筌筆富士巻狩図大絵馬（金乗院所蔵）

・朝鮮式銅鑼：伝説によると、霊亀 2 年（716 年）に高麗国の王辰爾が武蔵国に移住の折、自国から持参したもの、あるいは隣接する大鐘（現在の所沢市上山口の一部）の地で土中から掘り起こされたものと伝えられています。しかし、その作風や形からみると、朝鮮から渡来したものではなく、江戸時代の中期頃、わが国で鋳造されたものと推察されます。

境内の主な見所

・加治水：弘法大師が草堂を結んだ頃に湧き出た泉と言われる。
・義貞誓の桜：新田義貞が鎌倉攻めの際に桜の一枝を折り、馬の鞭としたと言われる。
・芭蕉句碑：花生塚　亮盛和尚建立
・開山堂：亮聖建立　高野山刈萱堂の引導地蔵をを勧請
・木馬堂、・閻魔堂、・仁王門、・琵琶島弁天堂
・水盤　寛政 11 年武蔵国多摩・入間・高麗 3 郡 70 数ヶ村が奉納
・文松翁之碑　大正 8 年建立
・西国三十三観音

3 番六斎堂の御朱印はここで頂いて下さい。

３番六斎堂：正観音

本尊は正観世音です。創立年代は不明ですが、文化二年(1805 年)の狭山三十三観音巡礼記によると当寺は六観音が祀られていたようです。

六斎とは月に六日（8,14,15,23,29,30 日）は斎戒謹慎し善心を起こすべきとする民衆教化の宗教行事でした。その後は無住が続き、昭和 17 年より、金乗院の所属となっています。

４番正智庵：十一面観音

臨済宗妙心寺派。僧白瑛（宝暦 7 年 1757 年寂）が創建したといいます。広い境内の真ん中に、小振りな正智庵がポツンと建っています。

狭い庵の中に石像が三つ並び、真ん中が本尊の十一面観音で、明治十二年の造立といいます。左が貞享三年（1686）造立の聖観音で、右が延宝六年（1678）造立の地蔵菩薩です。

正智庵の御朱印は５番勝光寺で頂いて下さい。

５番勝光寺：白衣観音

瑞幡山・勝光寺は臨済宗妙心寺派で、弘安元年（1278）に創建されました。本尊は白衣観音。開山は建長寺一世石門和尚、開基は北条時宗。その後火災等で衰微しましたが徳川家康に寺領 1 万坪と 20 石の朱印が与えられ諸堂宇が再建されて現在に至ります。

注：「開基」とは、寺院の創始にあたって必要な経済的支持を与えた者、ないし世俗在家の実力者を指す。「開山」は寺院を開創した僧侶（すなわち初代住職）。

山門＜市指定文化財：建築物＞

元禄 9 年（1696）の建築で、禅宗様式をよく伝えた貴重な建造物です。三間一戸楼門といい、楼門としては最も例の多い型式になります。門の両側にはかつて仁王が安置されていました。正面の桟唐戸の上には、勝光寺の山号「瑞幡山」と書かれた扁額が掲げられています。

本堂＜市指定文化財：建築物＞

勝光寺本堂は、「京都龍安寺の塔頭の方丈を延宝 5 年（1677）に移築、行田の宮大工が建築した」との伝承をもちます。現在、本堂は入母屋造の桟瓦葺ですが、この形式は昭和 34 年（1959）に改められたもので、それ以前は寄棟造の茅葺でした。建築形式や意匠は、江戸時代初期における京都の臨済宗系寺院の方丈建築の特色をよくあらわし、京都からの移築の可能性をうかがわせます。しかし、建物調査によると、柱間は京間の寸法基準とは異なり、江戸時代の関東間の寸法基準をとっています。また、製作時期が異なると思われるヒノキ柱とケヤキ柱が混在し、ヒノキ柱の多くに新しい材で継ぎ足した根継ぎが見られました。このことから推測すると、この建物は、京都で解体され運びこまれた前身建物の部材を用い、行田の宮大工が関東間として建築したものと考えられます。関東地方では、稀な建築形式を受け継ぐ建造物として大変貴重です。

２番仏蔵院：十一面観音

山口貯水池の湖底に沈んだかつての勝楽寺村の中央に位置したこの寺は現在地に移されました。学びの記録に神澤さんが書かれた佛蔵院（勝楽寺）を参照下さい。

勝楽寺村

真言宗辰爾山**仏蔵院勝楽寺**の名を取った勝楽寺村及び堀口村は東京の水がめとして造られた山口貯水池の湖底に没しました。そこには、山口村大字勝楽寺村と大字上山口があり、勝楽寺は、刈谷戸、神門、北入、中笠と大笠、上山口の堀口と、六つの集落により構成されていました。

狭山丘陵の谷の奥まった所に広がり、自然に満ち、所沢から青梅、八王子へ通じる道路が貫いていました。明治時代、所沢の織物が隆盛をみた頃はこの地域の村人達が中心となり「所沢絣：飛白」を生産していました。しかしこの地域は昭和 7 年、増え続ける東京市民の水がめとして建設された貯水池の湖底に没してしまいました。湖底に沈むことになり、そこに住む人々は移転を余儀なくされました。移転した数は 282 戸、家族全体の人数は 1720 余名、大部分の 190 戸が農業で、次が織物業 20 戸でした。 所沢絣の衰退の要因の一つにあげられます。（所沢ふるさと散歩より抜粋）

仏蔵院（勝楽寺）：元は勝楽寺村にあった。現在は勝楽寺と呼ばずに通常仏蔵院と言われています。草創は 716 年朝鮮から渡来した**王辰爾一族**（墓地に王辰爾？を供養する五輪の塔がある）が勝楽寺聖天院を建立した時にはじまる。その後、弘法大師と伝えられる僧により薬師如来・蔵王権現が刻まれ辰爾山仏蔵院として再興、武蔵野一の霊場となった。また頼朝の祈願所となって十二社十二坊を数え社寺とも繁栄した。

その後廃墟になり、また復興されました。明治維新により寺社は分離され、その後の山口貯水池の建設にともない、神社は中氷川神社に合祀され、寺院は現地に移されました。境内には勝楽寺村にあった馬頭観音等の石造物が多くあります。

仏蔵院の杉戸絵は石川文松*の作で所沢指定文化財に指定されています。

蓮花図杉戸絵

６番瑞岩寺：十一面観音

祥雲山瑞岩寺：曹洞宗

本尊：十一面観世音菩薩

瑞岩寺は山口氏により室町時代初期に創建された寺。墓地内には、山口氏三代の墓とされる三基の五輪塔・宝篋印塔（市文化財）が安置されている。この石塔のうち、向かって左側のものは永徳 3 年（1383）の年号が刻まれており、足利氏満と戦って戦死した山口高実の供養墓とみなされている。またこちらには**岩崎鬱獅子舞**（市文化財）という伝統芸能が伝わっている。これは、慶長 19 年（1614）に当地の地頭であった**宇佐美助右衛門**が大坂冬の陣の帰途に京都で求めたという 3 頭の獅子頭を用いて始まったという行事で、現在では**毎年 10 月第 2 土曜日**に行われている。

・旗本宇佐美氏の墓

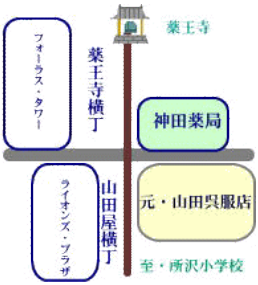
右端の墓は慶長 20 年（1615）、以下順に慶安三(1650)、元和五（1619）、慶安元(1648)、承応元(1652)、明暦三（1657）、

寛文九(1669)、延宝六（1678)、正徳四（1714）の年号です。

宇佐美助右衛門は 1615 年に亡くなっており、その後岩崎は久貝氏の知行地になっているので、右端が宇佐美助右衛門その他は久貝氏の墓ではないだろうか。

・瑞岩寺の墓地を見てみよう

山田力蔵：初代　文久 2～大正 2（1862～1913）　**山田呉服店**（写真）を経営：明治 24 年に創業、時代の先端を行く日用雑貨も取り扱う所沢で最初のデパートとして賑わいました。東京の五大呉服店と同じ店より仕入れる地方店はここだけであったと言われています。



２代目山田力蔵は明治 34 年生まれ、早稲田大学を卒業後所沢実業校（現在の所沢高校）に英語教師として採用されました。その後、「山田呉服店」を経営しながら、戦後は**町長**に就任。温厚篤実な学者町長として町民から慕われていました。その後も**所沢市教育委員長、所沢商工会議所会頭**を歴任。昭和 38 年 62 歳でその生涯を終えるまで、市勢の振興に力を注ぎました。

山田裕通：山田うどん　創業者、商工会議所会頭等

この他、山田姓の古い墓が多く見られたが、久米村は旗本山田氏の知行地であり、その子孫か？

７番瑞普門院：千手観音

上洗山普門院、真言宗豊山派で本尊は不動明王。なお、観音霊場の札所の本尊は千手観音。開創は天平宝字年間(757~64)、弘法大師巡錫の際に三ツ井戸を加持祈念した。その時不動明王を彫り、安置したと伝えられている。元来西所沢町の東川のほとりにあったものを、寛文年間(1660~72)に、現在の地に移された。

上洗山：かみあらい：上新井

古くは六所神社の参道近くに池があった。帯解のお祝いなどでお参りするとき、その清水で髪を洗ってから参拝したので髪洗いと言って趣のあるところだった。それが上新井と呼ばれるようになった。
（越阪部三郎さん　談）

・普門院の石造物

「西」天保 3 年(1832)　「北田園」から移設されたもの、内容不明。

聖徳太子　宝暦 2 年（1752）　建造　聖徳太子講中 35 人

馬頭観音　明治 17 年(1884)

弁財天　宝暦 2 年(1752)

奥多摩新四国八十八ヶ所第七十二番札所（昭和 9 年）

右：大日如来、左：弘法大師

馬頭観音像(三面六臂)　安永 2 年(1773)

馬頭観音：観世音菩薩はあまねく衆生を救うために相手に応じて変身すると説かれている。馬頭観音は頭に馬を乗せてにらみつけるような忿怒相をしているが、これは馬のごとく四方を駆け巡り、魔を蹴散らし承伏し、あらゆる重症を食べ尽くしてくれることを表している。忿怒相をしているため馬頭明王とも称される。また、馬頭観音は六観音の一つで、畜生道にいる者を救うために配される。

江戸時代後半になると、馬の供養を目的に、個人や牛馬に関係のある職業の人達の講集団によって供養塔が造立されるようにもなる。祀られる場所は、交通の難所、道の辻、村の境、屋敷内などである。文字塔もあり、所沢市内に 115 を超える馬頭観音を祀る石造物があり、地蔵菩薩に次いで多い。

六地蔵　文政 4 年(1821)　台石は平成 7 年　　等

・**鹿島岩吉**（墓地に鹿島家の墓があったので、関連して）

鹿島建設の創業者である鹿島岩吉は文化 13 年（1816）に**小手指村上新井で生まれ**、東京四谷で大工の修行をした後に、天保 11 年（1840）、「大岩」という屋号で京橋に店を構えた。**岩吉の子岩蔵が初代鹿島組（後の鹿島建設）組長。**

８番新光寺：聖観音

・本尊の聖観音は行基（668~749）の作と伝えられている。源頼朝が那須野へ鷹狩りに行く途中にここで昼食をとった折りに、その時仮小屋の地を寺に寄進したといわれている。また、新田義貞が鎌倉攻めに向かう途中この寺で戦勝祈願をし、戦いに勝って帰路に立ち寄り、黒塗りの乗鞍を奉納すると共に、失っていた寺領を回復したと伝えられる。

・1486 年道興准后が当時観音寺と呼ばれた新光寺に立ち寄ったことが書かれています。それには　野老澤（のろざわ）という所に行った時に、酒の肴に薯蕷（ところ）という物が出て歌に詠んだということが記されています。

「野遊のさかなに山のいもそえて　ほりもとめたる野老澤かな」

これにちなんで、所沢の市章の中央には「ところ」の葉三枚が、組み合わされています。

・地元では昔から「馬の町」の「観音様」と呼ばれ、当時の貨物や商品の運搬に活躍した馬の健康と交通安全を祈願したお祭りが毎年 2 月 18 日に開催されていました。

・境内のシダレザクラも見事だそうです。

本堂裏の絵馬：明治時代のものだが髷を結っている人もいる。

以上